

古イースランド語母音組織について

大 塚 光 子

問題の所在

古イースランド語 Forníslenzka (ca. 900~1530) の母音組織は、ゲルマン語派の他の言語と同じように Umlaut 現象のためにはなほだ複雑なものになっているが、さいわいなことにわれわれは 1150 年ごろに書かれたと推定される *First Grammatical Treatise*¹⁾ によって当時の母音組織の概容を知りうる。

しかしながら、FGT の記述は、とうぜん予想されることであるが、後に述べるように音声の描写が充分といえず、phonological な立場に立って母音組織を解明しようとするとき、十分な裏付けを与えてくれるわけではない。

従来、古イースランド語の持つ母音組織に関する意見はほぼ一致していた。しかし、E.H. Antonsen が論文 *Germanic Umlaut Anew*²⁾ で述べている所説は理論的に過ぎるきらいはあれ、問題に新しい光を投じたものである。

以下に伝統的な考え方と Antonsen のそれを比較して、問題点を整理してみる。

1) Haugen, Einar, ed. and transl., *Language monograph* 25, Baltimore, 1950. (以下 FGT と略)。これは仮りに First Grammarian (以下 FG) と呼ばれている学識者によって書かれ、*Snorra Edda* の写本 *Codex Wormianus* の末尾に収められている。

2) *Language* 37, Baltimore. 1961.

I *First Grammatical Treatise* の問題

ラテン文字の採用

XI世紀初頭、古イースランドの議会 *Alþing* はキリスト教を正式に受け入れた。それとともにラテン語およびラテン文字がイギリス経由で導入され、XIII世紀初頭にはラテン文字で母国語を書き表わそうとする試みがなされている。¹⁾

ゲルマン民族は早くからエトルリア文字に起源を持つラ・テーヌ時代の北イタリアのアルファベットに由来すると推定されるルーネ文字を持っていて、おびただしい石碑を残している。しかし、この文字はこんにち的な意味での役割を荷なうことはほとんどなく、文字そのものが魔力を持っていると信じられていた。したがって、碑文も単なる文字の羅列であったり、文章の形をとっていても短いものが多く、言語学的な価値を持つものは比較的少ないが、それでもゲルマン語派の古形を知るための貴重な資料を提供している。

IX世紀末に端を発したイースランド島への植民以後もルーネ文字が用いられた形跡はあるが、記述 *writing*³⁾ の伝統とはまったくつながっていない。イースランド語の字母に見られるルーネ文字の *þ* は古代英語で用いられていたのを借用したものである。イースランド人で初めてラテン文字を本格的に用いたのはアリ・ソルギルスソン *Thorgilsson, Ari* (ca. 1067~1148) とされている。かれの「イースランド人の書」*Íslendingabók* は原型がほぼそのまま残っているが、文体は記述の先駆者らしく、《直載であるが唐突でもたもたしている》。⁴⁾

First Grammarian はアリにつぐ、言い換えればラテン文字が採用された次の世代の人とみなされている。音声学の発達したこんにちとは異なり、外国語の文字を音韻組織の異なる言語に適用するまでにはかなりの試行錯誤があったことだろう。FGの意図はまさしくその正字法の改革にあった。しかし、ここ

1) Noreen, Adolf, *Altisländische Grammatik*, Halle, 1923, p. 34.

2) Turville-Petre, G., *The Heroic Age of Scandinavia*, London 1951, p. 19.

3) ここでは、言語の文字による定着を意味する。

4) Turville-Petre, G.: *op. cit.*, p. 181.

で問題になるのはそのいわば副産物であるかれの音韻論である。

First Grammarian の証言

かれは phonological に有意味 relevant な識別的対立 distinctive opposition を持つ各音声はそれぞれ個有の文字語号を持つべきだという原則にのっとり母国語を分析して、かれ自身の正字法を提案している。母音については、9文字（すなわち9音韻 phoneme）の必要性を主張している。それらは、ラテン文字からそのまま借用した a, e, i, o, u と Umlaut 母音を表わすためにラテン文字を組み合わせてかれが考案した e, ø, y, ø¹⁾ である。新しい文字が考案された過程は当該の音に対するかれの認識の仕方を示している。

たとえば、ø²⁾ についてみれば、

ø gets its loop from a and its circle from o, since it is a blending of their two sounds, spoken with the mouth less open than for a, but more than for o. であり、e は、

e is written with the loop of a, but with the full shape of e, since it is a blending of the two, spoken with the mouth less open than for a, but more than e.³⁾

これらの新文字採用の必要性に対しては反論が予想された⁴⁾。それに対してあらかじめ FG が用いた弁明は、いわゆる《置き換えテスト》commutation test を通じてであった。まず、かれは自分の主張する9文字のうち、i 以外の8文字について音環境の同じ単語を並べて、文字（音）の違いが意味の違いを生ずることを証明している。たとえば、

A man inflicted a wound (sár) on me; I inflicted many wounds (sór) on him……The priest alone swore (sór) the oaths (sþóren). Sour (súr) are the sow's (sýr) eyes, but better so than if they popped.⁵⁾

1) First Grammarian は Umlaut 現象それ自体には気付いていない。

2) 3) Haugen, Einar: *op. cit.*, p. 13-14.

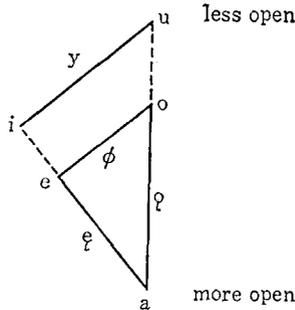
4) *Ibid.* p. 14.

5) *Ibid.* p. 15.

こうして導入された9母音の関係は上記の例からも判るように開き *aperture* の程度をメルクマールとしてとらえられている。図式化すると次のようになる。

less open	e	o	e	u
	ɛ	ɔ	ø	y
more open	a	a	o	i

E. H. Haugen はこれを次図のような母音三角形に書き直している。¹⁾



FG はついでこれら9音韻はそれぞれ長・短、鼻音・非鼻音の対立を持ち、かつ音韻論的に有意味である、と述べている。²⁾ ここでもふたたび《置き換えテスト》を行なって主張を裏付けている。例を挙げれば、*hár* (髪) に対して、*har* (サメ)、*þél* (布) に対して *þél* (道具)、*ró* (構円) に対して *rǫ* (角) のごとくである。

FG が述べているように、はたして鼻音が音韻論的に有意味な対立をなしたかどうかについては、他にそれを示す証拠がないため、その真偽性についてはしばしば論議をかもしてきたが、かれの挙げているいくつかの例のうちで鼻音が前後に存在しないばあいにも、語源的にはかつて鼻音を含んでいたことが判明し、³⁾ こんにちではかれの観察の正当性が認められている。しかし、この対立はまずアクセントのない音節で、ついで長音節に続く母音、最後に短音節に続

1) Haugen, Einar: *op. cit.*, p. 32.

2) かれは鼻音については´を、長音については˘を文字の上に付加することで区別している。

3) *þél* < **finhlo*-, *rǫ* < **wranhō*-, 等 (Haugen, Einar, *op. cit.*, p. 34).

く母音でなくなり、Trubetzkoy のことばでいえば《Resonanzeigenschaft》は古イースランド語では意味を持たなくなる。長・短については FG の時代にはアクセントのある音節ではどちらでもありえたが、古典期以後はその音をとりまく音的¹⁾環境によって、かなりの制限を受けるようになる。

II 古イースランドの古典時代

正字法の混乱

FG の記述を実証するための資料はかれと同時代もしくはそれ以前においては残念ながら皆無と言ってよい。古イースランドでは 1150 年以後には説教その他の断片的な手稿が存在し始めるが、本格的な記述の伝統が確立するのは 1200 年以降²⁾である。これ以後 1350 年のあいだに多くのサーガやエッダが書かれ、古イースランドの《古典時代》といわれる。この時期はまた言語音も大きく変化し、それを反映して写字生たちのあいだに正字法の混乱がみられる。音韻変化の方向にそった混乱が大半を占めるが、表記法が写字生によって異なるばあいもあった。

母音についてみれば、a と ǫ, φ と ǰ のあいだに見られる混同は XIII 世紀後半の a > ǫ, φ < ǰ を反映したものであろう。φ と ǰ は古典期後期になると現代イースランド語のように両者とも ö で表記されるばあいもあった。e および φ の長音を表わすさい補助記号を用いるばあい (é, φ) と、æ および œ を用いるばあいとある。e はまた æ でも表記され、そのばあいは長音は ǣ で示された。その他 e と e, e と φ のあいだにもその使用に混乱が見られる。このことから判るように古典期以後は母音の数を減らす方向に進んでいる。通時的にも共時的にも不変のものではない音韻を一時期に限ってとらえることは、それがすでに過去のものであるばあいにはなおさら難かしいことであるが、ここでは FG の時代からあまり変化していない 1200 年ころ、すなわち記述の伝統

1) 詳細については、Chapman, K.G.: *Icelandic-Norwegian Linguistic Relationships*. Universitetsforlaget, 1962, pp. 45 ff. 参照。

2) 具体的な資料については、Noreen, A.: *op. cit.*, p. 9 ff. に詳しい。

が定着してまもないころの古アイスランド語の母音目録を A. Noreen の標準に従って挙げてみる。音価についても伝統的には、ほぼ一致していて母音組織の模様変をえしてしまうような意見の相違はないのでいちいち論じない。ここでは国際音声字母に従って、伝統的な音価を表わした。

文字	例	発音
a	land (土地), aka (行く)	[a]
e	gekk (行った), ef (もしも)	[e]
æ	mænn (人びと), ætla (考える)	[ɛ]
i	mikill (偉大な), finna (見つける)	[i]
o	sofa (眠る), horfa (向ける)	[o]
u	una (満足した), muna (思い出す)	[u]
y	kyn (一族), tyggja (かむ)	[y]
ǰ	lǰnd (land の複数形), nǰkkurr (誰か)	[ɔ]
ϕi	kϕmr (来るの 3 単・現), mϕlua (砕く)	[ϕ]
ϕe	gϕra (作る), rϕkkua (暗くなる)	[œ]

これらの母音は FG の時代同様、Haugen が図式化したように 3 class — 4 degree の母音組織だったと思われる。しかし、上に見たように FG が Umlaut 母音の特質を記述するに際して用いたメルクマールは無意識のうちに tongue position をも含んだ (e—ϕ—o, i—y—u) 開きの関係のみであって、唇の形による音の区別をしていない。はたして、かれがその特質を考慮に入れなかっただけなのか、それとも円唇化現象は存在しなかったのか、われわれはかれの論文からだけでは知りえないのである。

Umlaut 現象中にみられる母音間の関係

伝統的には古アイスランド語にみられる u(w)-Umlaut は円唇化, i-Umlaut は前舌化現象であると説明されている。以下に伝統的な観点よりみた Umlaut 現象中の母音間の関わりかたを見てみよう。Umlaut によって生じた母音は言うまでもなく、当初は phoneme としての独立した機能は果さず allophone として存在したわけであるが、条件としての音環境が失なわれた後もその変母音は

存在し続けて、phoneme として独立するに至ったものである。古イースランド語には大別して、3種類の Umlaut 現象があった。すなわち、

- 1) 開きに関する a-Umlaut
- 2) 円唇現象に関する u(w)-Umlaut
- 3) 舌の位置に関する i(j)-Umlaut である。

1) a-Umlaut による関係——後続音節の a によって開音化が行なわれた。

less open	more open	例
u	: o	horn (<*hurna), trog (<*truga)
i	: e	heþan (<hiþan), neðan (<niðr)

2) u(w)-Umlaut——後続音節の u もしくは w のために次に挙げる母音は円唇化現象を受けた。

unrounded	rounded	例
a	: ɔ	lɔnd (<landu), sɔk
e	: ɸ	rɔro, mɔga, tɔgr
æ	: ɸ	ɸx (<*ækus-), hɔggr
i	: y	nykr (<nikur), ykkur (<ikkur)

3) i(j)-Umlaut——後続音節の i もしくは j の影響で、すべての後舌母音はそれぞれ対応する前舌母音に変化した。

back	front	例
a	: æ (後 e)	ketell (got. katils), fremja (fram)
o	: ɸ	kɸmr (↔koma), sɸner (↔sonr)
u	: y	fyffa (↔fullr), lypta (↔lupta)
ɔ	: ɸ	hɔggr (↔hoggva), ɸle (<oðli)

この現象を見て気付くことは、i(j)-Umlaut と u(w)-Umlaut が同一の結果を生んでいることである。すなわち、y の起源は、

- 1) u の i(j)-Umlaut によるもの
- 2) i の u(w)-Umlaut によるもの、の 2 種類あり、ɸ に至ってははなはだ複雑でかつ興味深い起源をもっている。

- 1) o の i-Umlaut によるもの 2) ɔ の i-Umlaut によるもの
 3) e の u-Umlaut によるもの 4) æ の u-Umlaut によるもの

ところが、2)および4)の ɔ, æ はそれぞれ、a の u-Umlaut, i-Umlaut を通じて生じたものである。

φ の 問題

1879年に、いち早くこの事実に気付いた Ludwig Wimmer は、*Det philologisk-historiske Samfunds Mindeskraft* 179 の中で、記号 φ で表わされるものには元来ふたつの音韻があったと推定している。すなわち、e および o に起源を持つ φ は close [φ] であり、æ および ɔ に起源を持つ φ は open [œ] であるという。たとえば、古イースランド語の *sǫkkua* (沈む, 沈める) は原始ゲルマン語のふたつの単語——**sinkūa-* (沈む) および **sankūian* (沈める)——から出ているが、Wimmer はこれらはそれぞれ次のような発展を遂げたとしている。

**sinkūan*→原始ノルマン語 **sekkua-*(n の前で i>e, n+k>kk)→古イースランド語 *sǫkkua* (e の u-Umlaut)。

sankūian*→原始ノルマン語 **sænkūa-* (a の i-Umlaut)→sœkkua* (æ の u-Umlaut)

そして、両者が *sǫkkua* で代表されるようになった、という。したがって、少なくとも古イースランド語の初期の段階においては φ に /φ/ と /œ/ の両音韻を認めているものである。その後、1958年に L. F. Brosnahan および G. W. Turner も Wimmer とは別箇にこれと同一の結論に達している。Adolf Noreen も同様の考えを持っていたと思われる。かれの示した母音組織図はつぎのとおりである。¹⁾

	Velare		Palatale					
	od. Hintere		Mittlere		Vordere			
Ohne labialisierung:	a	á	æ	ǣ	e	é	i	í
Labialisierte:	{	ɔ	ó	φ				
		o	ó		φ	φ		
		u	ú				y	ý

1) Noreen, A.: *op. cit.*, p. 44.

Antonsen の問題提起

この伝統的な考え方に対して E. H. Antonsen は次の点を出発点として批判している。i-Umlaut は調音の位置のみ同化現象を起し、唇の形については影響していない。それと平行に考えれば、u-Umlaut も元来は調音の位置のみ影響を与えたのであって円唇化現象は起さなかったと推定される。

この仮定を頭において、かれはゲルマン語派の Umlaut の発展を理論的に再構築している。それによれば、原始ゲルマン語は high front spread ¹⁾ /i/, high back rounded /u/, low neutral /a/ を母音として持っていた。/a/ は開きの性格のみを持ち、その他については無色であるから、その Umlaut の結果は開きの同化作用 assimilation のみであり、他の特性はそのまま維持される。したがって、/i/ の /a/-Umlaut により mid-front-spread の /o/ が生ずる。/i/-Umlaut のばあいには /a/ に対しては開きと前舌音の作用を及ぼして、/æ/ を生ぜしめ、/u/ に対しては舌の位置および唇の形で対立しているが、舌の位置のみ作用して high front round の /y/ を生ずる。/u/-Umlaut については /i/-Umlaut とまったく平行に考え、それぞれ /a/ より /u/, /i/ より /w/ が生ずる。加えるに Antonsen は /a/ が /i/ および /u/ の影響を同時に受けるばあいを設定している。その際は舌の位置は中和され、開きのみが影響されて、higer-central の /ə/ を生じる。こうしてまず、次の図のような母音とその allophone が生じたと仮定されている。

/i/ [w]	[y] /u/
[e]	[o]
[æ]	[ə] [a]
	/a/

[...] 内に示された allophone のうち、まず e, o が弱音節での /a/ の消失によって phoneme として独立し、こんどはそれぞれ自分の allophone を /u/-Umlaut, /i/-Umlaut を通じて生む。すなわち、mid-back-spread の [ʌ], mid-

1) 以下、音の描写は日本語で表現すると却って判りにくくなるので、あえて英語を用いた。

front-rounded の [ɸ] である。ここに計 5 個の phoneme と 7 個の allophone が生じたわけであるが、すべての allophone は弱音節での /-i/, /-u/ の消失によって、それぞれ phoneme としての価値を持つことになり、その結果次図のような 4+4+3+1 の母音組織が出来上る。

	Front		Back	
	Spread	Rounded	Spread	Rounded
High	/i/	/y/	/w/	/u/
High-mid	/e/	/ɸ/	/ʌ/	/o/
Low-mid	/æ/	/ə/	/ɑ/	
Low		/a/		

Antonsen は古イースランド語に見られる i-Umlaut と u-Umlaut の一致を説明するために、資料が古イースランド語より古い古代英語にみられる back spread 母音 /ʌ/ が、資料に残される以前の古イースランド語にも存在していたと仮定している。そして、上記の sǫkkua の発展の跡を次のように描き直している。

*/sinkʷan/ > */sekkua/ > */sakkua/ (/e/ の u-Umlaut)

*/sankʷian/ > */sökkua/ (a の /i/ および /u/-Umlaut)

しかし、FG の時代にはゲルマン語派の母音組織が最も膨張した時代の 4—4—3—1 のシステムはすでにかんりの変革を受けた後であり、/ɸ/ と /ʌ/ は /ə/ と一緒になって、ひとつの phoneme /ə/ となってしまっていた、という¹⁾。かれのこの推理に従えば、古イースランド語において ɸ で表わされている音は、/ɸ/, /ʌ/, /ə/ に起源を持ち中間音 /ə/ であることになる。Antonsen の推理による、FG の時代の母音組織図は次のとおりである。

FRONT SPRED	CENTRAL	BACK ROUNDED
/i/ i	/i/ y	/u/ u
/e/ e	/ə/ ɸ	/o/ o
/æ/ æ, e		/ɑ/ ɔ
	/a/ a	

1) Antonsen は、y の音価をも非円唇として /i/ で表わしている (Antonsen, E.A.: *op. cit.*, p. 222)。

すなわち、かれは mid-class の母音は front-rounded ではなく、central vowel としてとらえている。

Antonsen への疑問

Antonsen の非常に割り切った理論的な説明は言語の発展過程のひとつのあり得べき姿を描き出している。しかし、ゲルマン祖語の母音を i, a, u とすることへの疑問は別として、はたして実際の言語はこのような合理的な説明を許すだろうか。また、i-Umlaut と u-Umlaut を平行現象と見ることがかれのばあい出発点であったが、別箇の現象と考えても差し支えないと思われる。むしろ、《a や o が発音される時に、i もしくは y を準備する傾向を持つ¹⁾》ことが、i-Umlaut であるから、u もしくは w を準備するばあいには円唇現象をも準備したと考えるほうがより自然であり、ありそうなことである。また、言語の一般的な傾向として、3-class の母音組織においては medial-class は front-rounded²⁾ であるばあいがもっとも多い。

しかし、古イースランド語のばあいはすでに音は失なわれているのだから、実際はどのような音であったかは推測の域を出ないが、写字生たちの混乱に見られるように、古典期にはすでに Umlaut 母音はかなりあいまいなものになっていたらしい。あるいは mid-class においては唇の形は音韻論的には有意味ではなかったのかもしれない。今後の古イースランド語母音組織の研究には、ゲルマン祖語にさかのぼる Umlaut の発展とその変容の歴史的展開を考慮した、実際の資料の再検討が必要とされよう。

(1970. 8. 31)

(筆者の住所：東京都武蔵野市吉祥寺東町1~8~3 〒180)

1) Meillet, A.: *La methode comparative en linguistique historique*. tr. by Ford, G. B.: *The Comparative Method in Historical Linguistics*. Paris, 1967 p. 118.

2) Trubetzkoy, N. S.: *Grundzüge der Phonologie*. 4. Aufgabe. Göttingen, 1967, p. 92.